

介護について考え始めたきっかけ

比田勝中学校三年 永野 由芽

私は祖父母が大好きだ。昔はよく週末に遊びに行っており、お互いの最近起こったことを話したり、聞いたりするのが好きだった。だが中学になり、会いに行く回数が減ってしまった。寂しかったが自分の予定を優先していたのである。

そんな中、昨年母方の祖父が軽度の認知症と診断されたと聞いたのだ。私は言葉を失っ

た。以前祖父が母に同じことを何度も尋ねていたことを思い出したため、いつか祖父が私とみんなのことを忘れてしまうことを恐れた。すぐ祖父のもとへ行くと、
「おお、久しぶり。よく来たね。」
と応えてくれたが、当時全く会っていなかった。なので私の不安は消えなかった。そのため頻繁に電話をするようにし、自分の名前を言うてから会話を始めるようにした。

しかし不安になる出来事は数ヵ月後にも起

きた。祖母が夜中に転び、救急車で運ばれてしまったのだ。私達は祖母がとても心配で、最悪の場合を想像してしまい怖くなった。検査の結果、幸い足の骨折だけでした。一ヵ月入院することになってしまった。そのため、私達が祖父の認知症の薬を管理しつつ、母が祖母の服やその他必要なものを定期的に持つていくようになった。祖父にはお薬カレンダーを買い、一週間分の薬を入れて、毎日「おじいちゃん、薬飲んだ？」と妹と電話していた。

ある日薬を入れながら祖父と話していた時、「じいちゃんは百二十歳まで生きるけんね」と力強く話してくれた。祖父の口癖ともいえるその言葉は何度も聞いたことがあったのだが、私は少し泣きそうになった。名前を忘れられているなど感じたこともあったし、もっと会いに行ったり、電話したりしていれば良かったのかもしれないと後悔することも多かったからだ。けれど、祖父がまだまだ元気に生

きると笑っている姿を見て、私は身に染みて
今の自分に出来ることをしなければならな
と感じた。

祖母は一ヵ月後には少し歩けるようになって
たし、祖父の認知症は軽度だ。けれど、もし
二人とも重症だったらと思うと今でも怖くな
る。大切な人がいつ病気になったり、怪我を
負ったりするかは誰にも分からない。このよ
うな経験をしたため以前より福祉や介護につ
いて考えるようになったが、一人でも多くの

人が私と同じような経験をする前に考えても
らいたい。初めは深いことでなくても、福祉
や介護について特に若い人達には関心をもっ
てほしいし、私も更に探求していきたい。ま
ずは身近にいるお年寄りの方が心地よく過ご
せるように、思いやった行動をとることが、
高齢化社会を生きる私達に求められることな
のではないだろうか。